

「農山漁村」学生共創ガイドの概要

農山漁村の活性化に向け、若者の活力は極めて重要であるとともに、若い時から農業農村に目を向けてもらうことは、将来的な関係人口の創出につながる。より多くの学生の農山漁村への参画を促進させるため、①農山漁村で活躍する団体からなる**学生専門部会を設置し**、②**学生の活動を類型化させ**、③**学生・地域のメリットや課題を調査**、④**継続的かつ効果的な活動を実現する連携・体制モデルを整理した**。

① 学生専門部会の実施

◇参加メンバー

【学生団体】

北里大学 北里農援隊 / 千葉大学 援農お宝発掘隊 / 東京大学 東大むら塾 / 明治大学「楽農」4Hクラブ / 信州大学 村づくり応援隊 / 静岡大学 棚田研究会 / 名城大学 地域共創隊 WITH / 龍谷大学 学生団体rindo / 神戸大学 地域おこしサークル水芭蕉 / 山口大学 棚田・地域おこし学生応援隊 / 琉球大学 おきなわ食・農研究会

【中間支援組織】

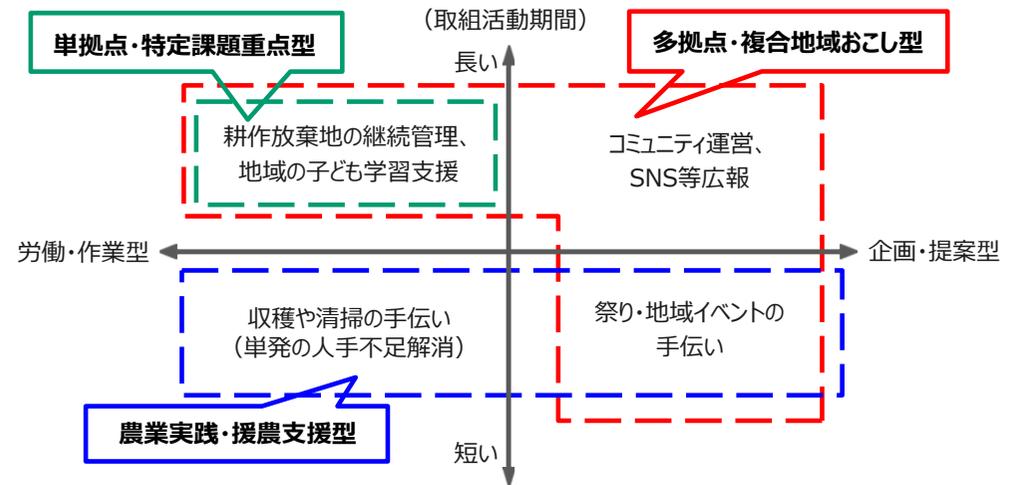
一般財団法人 日本グラウンドワーク協会 / NPO法人 bankup

◇議論内容

- 学生の参画理由の整理、持続的な取組体制
- 学生と地域が互恵関係を築ける活動の仕組み



② 農山漁村への貢献方法のパターン



③ 学生・地域双方のメリットと課題

	メリット	課題
学生	<p>1. 自己成長・キャリア形成 多世代とのコミュニケーションによる自己成長 / 一次産業・地域事業者の理解を通じたキャリア再設計への示唆の獲得</p> <p>2. 地域とのつながり・交流 農家や地域の方との充足感を持ったつながり / 農作業や地域行事へ参加することで得られる感謝の気持ちや達成感</p> <p>3. 現場理解・学び 高齢化や担い手不足など地域の実情の現場レベルでの理解 / 生産現場を知ることによる食のルーツを知る機会</p> <p>4. 精神的・身体的リフレッシュ 自然豊かな環境で身体を動かすことで得られる気分転換 / 農産物の成長や未経験の地域行事参加へのわくわく感</p>	<p>1. 地域側の負荷を具体的に想像しきれない 人手不足の解消になると関わり始めたが、事前の用意や維持管理などはすべて地域の方にお世話になる状態になってしまう</p> <p>2. 地域課題を汲み取れないまま活動してしまう 一般的な課題をイメージし、一方的な考えで活動を実施してしまい、単純な労働力に限られた活動・成果になる傾向がある。双方でより良い改善方法などが明確でないとシナジーが発揮されずに単発で取組が終了してしまう</p>
地域	<p>1. 地域の活性化・モチベーション向上 高齢化地域における若者の活力の感化 / 世代を越えた交流による刺激や学びによるモチベーション向上</p> <p>2. 労働力・人手不足の解消 農繁期や慢性的な人手不足へのサポート</p> <p>3. 地域文化の維持・継承 行事参加による地域文化の継続遂行 (例：神輿の担ぎ手)</p>	<p>1. 協働の際の負荷が大きい 農機具の準備、食事や寝泊まりする場所、教える手間などの負担がかかり、活動維持が非常に難しい</p> <p>2. 地域の課題を伝えられない 本来解決したい課題を伝えるタイミングがない、遠慮して伝えきれないことや、言語化できていないことで互恵関係が発展しない</p>

「農山漁村」学生共創ガイドの概要

④ 活動がより継続性を持ち効果的なものにするためのポイント／連携・体制モデル

◇共通事項： 互恵的成長と社会的成果

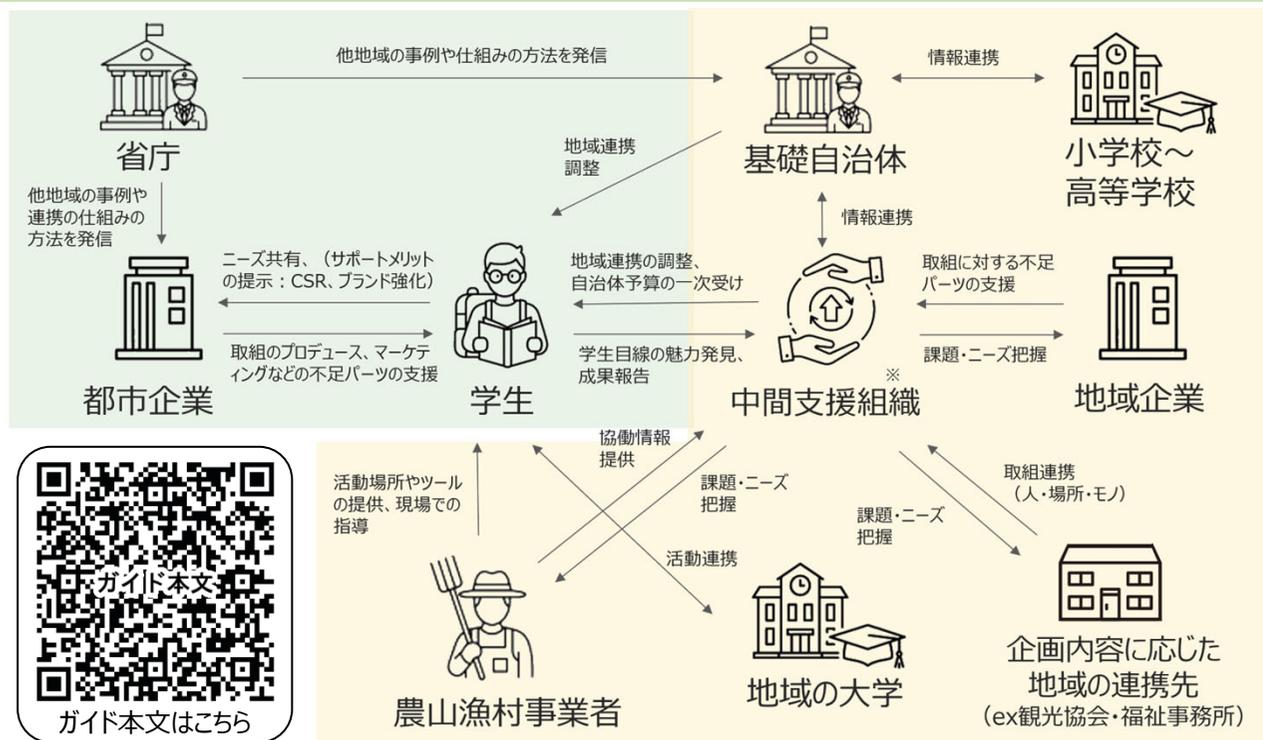
- 地域の課題解決と同時に、マルシェでの販売体験など学生側のモチベーションや実績積み上げになる取組をつくる。
- 地域側のメリットと学生側のメリットをすり合わせる。
- 取組が社会的成果にどうつながっているかの共通認識をもつ。

◇学生側： 適切な配慮と主体的な付加価値の明確化

- 学生側ができることを明示し、地域の期待値を上げすぎないコミュニケーションが疲弊感を減らす上で重要。
- 自治体や地域支援NPO等と連携したり、意見を聴くことで、地域に受け入れてもらえる行動になっているか常に意識する。
- 単純労働だけでなく、学祭での商品販売や大学のブランドを活かした情報発信など、学生ならではのできることを考え、自身の付加価値がどこにあるか考える。

◇地域側： 挑戦意欲の受容と動機尊重

- 活動が義務感にならないよう、学生は「楽しむ」ことを重視するタイミングがあることを理解する。
- 学生ならではの、フットワークの軽さや、社会的責任がないゆえの挑戦のしやすさが強みにもなることを許容する。



【コラム】 学生団体の活動事例・ロジックモデル、キャリアモデル座談会

農山漁村で活動する取組の入口として、学生のメリット等の整理は進んだ一方で、地域貢献への不安やキャリア形成への具体的なイメージの不足、取組の出口が不明瞭であることが分かったため、**(1)事例やロジックモデルの整理と(2)キャリアモデル座談会**を実施し、**今後の農山漁村の担い手となる若者や農山漁村における学生との連携の在り方や意義について考える企業や自治体**に参考となるよう、学生の取組が農山漁村に与えるインパクトや学生の取組の出口となる農山漁村でのキャリアモデルの可能性を示した(詳細は本ガイド参照)。

インパクトにつながる事業活動の事例

東大生地方創生コンソーシアム福島県伊達市での活動

あんぼ柿の発祥の地における生産量減少、耕作放棄地の増加、担い手・後継者不足という課題に対し、**市長への政策提言、圃場の存続支援、パティシエや海外のシェフとの意見交換で生まれた商品を学園祭で広報・販売**する等の施策で改善。学生が農業を身近に感じ、価値の担い手となることで、**製品の付加価値化や持続的な生産者の所得・意欲向上の仕組づくり**に貢献。



東大むら塾 千葉県富津市での活動

週1回の現地訪問を通じた耕作放棄地の減少や地域農業の労働力補充により、**農山漁村の持続可能な生活環境の維持**に貢献。米やクラフトビールなどの生産・販売は、地域ブランドの維持や生産者意欲向上を促し、**地域経済の活性化**に寄与。また、寺子屋や祭礼の手伝いにより、学生のサードプレイス(第3の居場所)形成、伝統行事の継続、将来的なU・Iターンなどの関係人口の増加が期待される。



静岡大学 棚田研究会 静岡県菊川市での活動

NPOと連携して棚田の管理・保全を行い、**棚田の原風景の保存**や希少種(ニホンアカガエル等)の生息環境維持による**生物多様性の維持**に尽力。農閑期の「あぜみちアート」実施は、棚田の認知度向上やオーナー制度と合わせた生産者の安定収入増加につながり、地域経済の循環に寄与。また、高齢化が進むNPOの担い手となり、**農山漁村の持続可能な生活環境の維持**にも貢献。

